



秋から冬にかけて注意してほしい病気 -RS ウイルス感染症-

概要：RS ウイルスによる急性呼吸器感染症です。乳児期の発症が多く、特徴的な病像は細気管支炎、肺炎です。

症状：4～6日間の潜伏期間を経て発熱、鼻汁などの症状が数日続きます。多くは軽症で済みますが、重症例はその後咳がひどくなる、喘鳴が出る、呼吸困難となるなどの症状が出現し、場合によっては、細気管支炎、肺炎へと進展していきます。低出生体重児や、心臓や肺に基礎疾患や神経や筋肉の疾患、免疫不全が存在する場合には重症化のリスクが高まります。重篤な合併症として注意すべきものには、無呼吸発作、急性脳症等があります。生後1か月未満の児がRS ウイルスに感染した場合は、非定型的な症状を呈するために診断が困難な場合があり、また突然死に繋がる無呼吸発作を起こすことがあります。

治療法：特異的な治療法はないため、通常は対症療法が行われます。

予防法：RS ウイルス感染症の感染経路は飛沫感染と接触感染で、発症の中心は0歳児と1歳児です。一方、再感染以降では感冒様の軽症であることが多いことから、咳等の呼吸器症状を認める年長児や成人は、可能な限り0歳児と1歳児との接触を避けることが乳幼児の発症予防に繋がります。接触感染対策として、子どもたちが日常的に触れるおもちゃ、手すりなどはこまめにアルコールや塩素系の消毒剤等で消毒し、流水・石鹸による手洗いか又はアルコール製剤による手指衛生の励行を行います。

※何度も感染と発病を繰り返しますが、1歳までに半数以上が、2歳までにほぼ100%の児がRS ウイルスに少なくとも1度は感染するとされています。

●病児/病後児保育利用基準

病児：全身状態が落ち着いていけば発症後1日目から

病後児：急性期経過以降



インフルエンザの予防接種は受けましたか？



インフルエンザは例年11月下旬～4月頃に流行し、例年1月末～3月上旬に流行のピークを迎えます。基本的には13歳未満の子どもには2回接種が推奨されています。インフルエンザワクチンの効果は接種後、約2週間からと言われているため、逆算して計算することが重要です。12月中旬までにワクチン接種を終えることが望ましいと考えられます。

※インフルエンザワクチンの効果は2回目接種1カ月でピークとなり、3～4カ月後には減少してきます。早めに接種を始める理由の一つに、冬のかぜシーズンに入ってしまうと、小さいお子さんほど風邪をひく回数が多くなかなかワクチンを受けられなくなってしまう、という事情もあります。

○病児・病後児保育利用実績

- 8月1日～8月31日：合計29件（気管支喘息、上気道炎、頭痛、結膜炎、急性気管支炎）
 9月1日～9月30日：合計32件（RS ウイルス感染症、アデノウイルス感染症、急性気管支炎、上気道炎、流行性角結膜炎、骨折、気管支喘息）
 10月1日～10月31日：合計24件（流行性角結膜炎、喘息様気管支炎、上気道炎、頭痛、感冒、急性胃腸炎 RS ウイルス感染症、感染性結膜炎）

